

オピニオン

外国人との共生・協働社会到来

グローバルマインドを  
育む大学教育

外国人との共生・協働社会が現実的なものとなった今、グローバル人材育成のあり方を具体的に提言する。

ローコンテクスト社会に  
日本の教育は未対応

外国人観光客向けに英語を勉強する秋葉原のメイドカフェスタッフ。大手証券会社の社員の4割は外国人。外国人留学生なしでは定員を充足できない大学・大学院。すでに日本には外国人との共生・協働社会が訪れつつあります。

これまでの日本は、人々が持つ知識、体験、価値観などに共通項が多く、少ない言葉で意思が通じるハイコンテクスト社会でした。一方、今足を踏み入れつつあるグローバル社会は、ローコンテクスト社会です。人々の背景が多様である分、共通理解が少なく、お互いに意見や要求を伝えあうコミュニケーションが求められます。実はローコンテクスト社会は以前から日本に存在していました。

それは、縦割り社会です。企業に例えると、総務・財務・営業部門では文化や慣習、使う用語も異なります。それらに配慮しながら意識し業務を行ったり、中間管理職は、トップの抽象的な目標を具体的な業務に置き換え現場に指示をします。高度な異文化コミュニケーション能力が必要なのです。これらは多様な人材が協働するグローバル社会で必要な能力と一致しますが、実は日本の社員教育、さらには学校教育でも育成が見逃されている能力でもあるのです。

異文化教育の要は「マインド」を育てること

では、日本人に足りない異文化コミュニケーション能力とはどのような力でしょうか。ここで、外国人留学生が日本人と協働したときの所感を紹介しましょう。図

横浜国立大学  
国際戦略推進機構 教授  
国際戦略コーディネーター

鈴木雅久

すずきまさひさ ● 1996年オーストラリア・クイーンズランド大学理工学研究科博士課程修了。1999年電気通信大学留学生センター助教授。2012年より現職。外国人留学生と日本人の協働を軸とした教育プログラムを運営。他大学や企業にも提供している。



取材・文 / 児山雄介 撮影 / 坂井公秋

表。彼らの見解に共通するのは、日本人の消極性、自信のなさ、相手に対する関心の低さです。つまり、異文化コミュニケーションの質を上げるために必要なのは、知識・技能だけでなく、相手に伝えようとする積極性、わかるようとする意志などの「マインド」なのです。このマインドは育てられるものだと私は考えます。

ちなみに、国際教育は国という単位が前提となりますが、グローバル教育は国や地域を尊重しつつも国境を越えた視野・視点に立った教育です。私がめざす後者の教育の本質は、グローバルな観点か

ら形成される人格教育です。戦後日本の教育はアカデミズムに基づいた知識・技術の教授に終始してきましたが、この教育モデルは果たして多くの大学がめざす人材像と結びついているのかどうか。今こそ方向転換を図るときです。

喜怒哀楽を含む  
感情体験授業

私自身も試行錯誤を繰り返しながら、マインドにアプローチする授業をつくり上げていく最中です。例えば、感情を動かす授業。コミュニケーションにおいて「感情」は必要不可欠な要素です。喜

グローバルマインドを育成する場が  
日本の学校や企業には欠けている

ばせる、悔しがらせる、恥を捨てさせるなど、授業後にどんな感情に至るのかをデザインするのです。また、成功体験を積ませる授業も大切です。日本人の「自信のなさ」は、多様な人々の中で理解しあったり、何かを共有できた成功体験のなさが原因ではないかと思えます。成功体験を積むことで異文化コミュニケーションに対するよい感情が生まれ、自信がわき、積極的に関わりようとするマインドが育つのではないのでしょうか。

ただ私が実践しているような学生の内面にふみ込む授業は、総勢50人という、指導者の意図が明確に伝わる規模からできることでもありません。数百人単位の学生相手では難しいでしょう。スケールは、細分化したほうが特徴的な教育が可能です。

学生にグローバルマインドを求める前に、教職員が日本から飛び出し、経験を積むことも大切です。教育プログラムの自由度の高さ、外国人や社会人など多様な人々と「共生・協働」しやすく、失敗が許される環境などを考えると、大学はグローバル教育に適した場です。グローバル人材の育成は大学だけでできることではなく、初等中等教育の役割も重要ですが、小中高の教員を養成するのは、大学です。我々が力を尽くさねばならないことは、間違いないでしょう。

外国人留学生から見た日本人の協働作業能力評価の一例

語学力	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 文法などを正しく言おうとしてかえって内容がぼやける</li> <li>● 下手でもいいから言い切ってしまう方がいいのと思う</li> <li>● 会話の内容を深めたリッチなコミュニケーションを行うことに興味を持ってもらいたい</li> </ul>
発言態度・参加姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 控えめすぎて、他人の意見に対して考えを述べたり議論したりできていない</li> <li>● 他人と協働することに自信がなさそうで恐れている</li> <li>● 他人と同じ意見であっても自分の言葉で語ってほしい</li> <li>● 他人の意見やコメントの内容に関して、表面的に受け入れることがある</li> <li>● 個人的な意見・感情の表現や、深いレベルでのコミュニケーションが難しい</li> <li>● 自分の意見に固執する人が多く、後から議論を蒸し返してくる</li> </ul>
思考・発想形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 思考・行動共に柔軟ではない</li> <li>● 真面目な話しかしようとしないのでおもしろくない</li> <li>● 内容の議論ではなく形式にこだわる</li> <li>● ステレオタイプな考えや既知の事例より、クリエイティブな考えやこれまでタブーとされていたことにも目を向ける勇気がほしい</li> </ul>
メンタリティ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● もっと心を開いて外国人の思考形態を理解してほしい</li> <li>● 共同作業の初めに自己紹介や楽しい話題でラポールを築くことの重要性を知ってほしい</li> <li>● 意見やアイデアに対する自信や是非とは関係なく、意見やアイデアを出して議論に参加することがお互いを知ることやラポールづくりに寄与していることを理解してほしい</li> </ul>

※YCCSを受講する外国人留学生に尋ねた、他大学の学生や国内企業の社員とのワークショップ後の所感(2018年)

学生に求める前に大学が  
まずやるべきこと

各大学が教育モデルを見直す際、まず必要なのは、育成目標に挙げ